「市民」はいかにして「人間」の顔を失うのか

― J. M. R. レンツの『ツェルビーン』

菅　　利　恵

要旨：ハーバーマスの近代化論は、親密な愛の領域を基盤とする「人間」や「人間性」の観念が、市民的な言説空間において一種の戦略的な機能をもったことを明らかにしている。すなわち「財産と家人の所有者」である「市民」が、自らを「人間」として、つまり社会的な制約から自由な主体的な感情の担い手として自らを理解し表現することで、「市民」としての階級的、経済的な利害も個人的自由への人間的な要請と同一視され、彼らの言葉や理念に「公益の仮象 Schein des Allgemeinen」が与えられることになったのだという。当時文芸公共圏では親密な領域を舞台に「人間的」な関係性が盛んに描かれたが、それは「市民」と「人間」の同一性を強調することによって上の過程を支えるものであった。

このように感傷的な愛の表現を通して「人間」としての自己表現が展開し、それを足がかりにして市民的公共圏が形成された時代にあって、J. M. R. レンツのテクストは、そうした時代の流れにまったくそぐわない側面を有している。本稿では彼の短編『ツェルビーン』を紹介する。そこで彼がいかにして「市民」から「人間」としての顔を剥ぎ取ったのかを追いながら、このテクストが市民的公共圏において持った独自性と意義を明らかにする。

『ツェルビーン』においては、入り組んだ恋愛物語を通して、市民知識層に属するひとりの若者が、「市民」としての存在形態と「人間」としての自己理解を両立させることに失敗する様が描かれている。階級的なヒエラルヒー構造の中で市民知識層が搾取され、また搾取するさまを描いたこの作品は、やがて露呈することになる市民的な言説の欺瞞、すなわち「市民」でありながら「人間」として語ることの否定しがたい欺瞞を、どこよりも早く問題化しつつ、ふたつの両立の重要性を明確に浮かび上がらせるものとなっている。

はじめに

啓蒙時代に市民知識層による文芸創作の営みが活性化したとき、これを牽引した劇作家レッシング Gotthold Ephraim Lessing（1729-1781）は、自身がドイツ語圏に広めた「市民悲劇 das bürgerliche Trauerspiel」を擁護しながら演劇において人物を「人間」として描くことの重要性を説いた。感傷主義を背景に、彼は観客の同情を呼び起こすことをなによりも重視したのだが、そのためには主人公が「人間」として共感できる存在でなくてはならないとしたのである。[1] 市民悲劇をはじめ、当時は私的な親密圏を感傷的に描く作品が流行しており、文学表現において人間性は、なによりも家族愛や恋愛といった親密な関係性を通して示されるかたちであった。その際に登場人物の身分的な出自は絶対的な意味を持たない。「市民悲劇」は「人間」として同情の対象となる等身大の存在を描く悲劇のジャンルであり、「市民」といいながらもその主人公はしばしば貴族であった。フランス国王の処刑を描いた『ルートヴィヒ・カペーあるいは国王殺し』[2] も、「尊い夫でありよき父」[3] として国王を描いているということから、「市民悲劇」を名乗っていたのである。

18 世紀後半の文芸公共圏において、上のように身分差を超えて「人間 Mensch」を描くジャンルが「市民 Bürger」という言葉でなんの違和感もなく飾られていたという事実は、当時「市民」と「人間」がきわめて曖昧に、しかも意図的に重ねあわせられていたことを端的に伝えている。そのように「市民」と「人間」が入れ替え可能であったこと、そしてこの入れ替え可能性こそが発展しつつあった市民的公共圏の要にほかならなかったことは、ハーバーマスがその近代化論で論じている。演劇の分野で「人間」の観念はなによりも親密領域の一員であることと結びついていたが、ハーバーマスの議論でも、「自由意志、愛の共同体、教養」を結集させた「フマニテート（人間形成）」（S. 111: 67 頁）[4] の概念は、どこよりも家族を中心とした親密領域をめぐる言説の営みの中で深められたとされている。それによれば、手紙のやり取りや感傷的な文芸作品を通して内実を与えられた親密な関係性は、「自由意志にもとづき、自由な個々人によって創始され、強制なしに維持されているように」（111: 67）みえることから、「フマニテート」の観念と直接結びつけられた。愛の関係性は、人間的なものの土壌として、またその具体的な表現としてとらえられたのである。

ハーバーマスの近代化論は、そのように親密な愛の領域を基盤とする「人間」や「人間性」の観念が、市民的な言説空間においてある種の戦略的な機能をもったことを明らかにしている。すなわちこの領域を足場にして、「いかなる種類の外的目的からも解放され」（111: 68）た自由な内面の主体である「人間」としての自意識が育まれたが、この自意識の担い手は同時に、「財産と家人の所有者」（120: 77）として社会制度と経済活動をになっており、「市民」としての社会的、階級的な利害に組み込まれた存在であった。ハーバーマスによれば、こうして市民的主体が「市民 bourgeoies」と「人間 homme」とを「一身に兼ねて」（120: 77）いたこと、それによって「利害関心を抱く私有財産所有者と自律的個人そのものとの同一化」が生じていたこと（188: 153）こそは、市民知識層の発言や価値意識が公共性を帯びてゆくための決定的な基盤であったという。つまりこの「擬似的同一性 fiktive Identität」（121: 77）のために、市民としての階級的、経済的な利害を語る言葉がそのまま、普遍的で人間的な要請として流通することになった。親密な領域を舞台に「人間的」な関係性を描く文芸作品は、「市民」と「人間」の同一性を強調することによって、市民知識層の「階級利害」が「公益の仮象 Schein des Allgemeinen を帯びるようになる」（160: 119）過程を支えていたのだった。

こうして感傷的な愛の表現を通して「人間」としての自己表現が展開し、それを足がかりにして市民的公共圏が形成された時代にあって、シュトゥルム・ウント・ドラングの潮流を代表する J. M. R. レンツ Jakob Michael Reinhold Lenz（1751-1792）は、そのような時代の流れにまったくそぐわないテクストを残した。本稿では彼の短編『ツェルビーン』を紹介する。そこで彼がいかにして「市民」から「人間」としての顔を剥ぎ取ったのかを追いながら、このテクストが市民的公共圏において持った独自性と意義を明らかにしたい。

1）

劇作家として知られるレンツの数少ない短編小説である『ツェルビーン』[5] は、作者のシュトラースブルク時代がまもなく終わりを迎える 1775 年末に書かれた。短期間で仕上げられ、翌 2 月と 3 月にボイエ Heinrich Christian Boie（1744-1806）の雑誌『ドイツ博物館 *Deutsches Museum*』で発表される。ボイエはゲッティンゲンで文芸誌を発行しながら若い詩人たちを励まし支えて

いた人物で、レンツが売り込んできた原稿に目を通すと、その価値を認めてすみやかに印刷に回したのだった。[6] 3 月のおわりにレンツは友人ゲーテ Johann Wolfgang Goethe（1749-1832）がいるヴァイマルの宮廷に向かう。しかし宮廷になじめないままゲーテと諍いを起こし、ヴァイマルを追放となった。その後統合失調症を発病してドイツ語圏の文壇からふっつりと姿を消すことになるのだが、『ツェルビーン』発表時の彼は、経済的にどん底にあったものの、作家としてまだ暗くない未来を前にしていた。1774 年に『家庭教師 *Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung*』で話題を呼んだ新進の若手作家が期待されてもいたことは、レンツの売り込みをボイエが大いに歓迎し、すぐさま自身の雑誌に載せたことにもうかがえる。

ヴァイマルを追放されて以降、レンツがドイツ語圏の文芸公共圏に再び受け入れられることはなかった。とはいえ完全に葬り去られたわけでもない。シラー Friedrich Schiller（1759-1805）が彼の遺稿を自身の文芸雑誌に載せているし、[7] 1828 年にはティーク Ludwig Tieck（1773-1853）が 3 巻本で全集を出した。[8] その後も断続的に再評価の光が当てられている。ただ、その際に注目されるのはもっぱら『家庭教師』などの劇作品で、短編小説『ツェルビーン』は今ではほぼ忘れ去られている。

発表当初の評判は悪くなかった。ボイエはこの作品を絶賛し、レンツへの手紙に読者の反応も上々だと書いている。[9] 実際一編の小説としての構成は緻密で、手堅くまとめられており、人間関係に働く力学が赤裸々に取り出されている。道徳問題を主題にすえた性格描写は当時しばしば見られた「性格画 Chraktergemälde」のスタイルであり、教えさとすような口調とお涙頂戴の語り口は、啓蒙主義と感傷主義の時代風潮によく寄り添ったものである。[10]

主人公のツェルビーンは若い学者の卵。「大胆で燃えるような想像力を持ち」、「どんな運命のもとでも決して品位を手放さない」ことを信条とする。（354f.）志の高いこの若者は、父親の金貸し業を継ぐのが嫌で、無一文で故郷ベルリンを飛び出しライプツィヒに逃げてきた。名高いゲラート教授の道徳講義を学び、数学の研究にもはげむうちに、真面目で熱心な態度を認められて、教授から、デンマークの裕福な若い伯爵の教育係の口を紹介してもらう。また数学の論文を書いて修士となり、代数学の講義で学生を集めるようにもなった。

まず、この主人公の像が、当時の市民知識層のあり方をとてもよく映していることを確認しておこう。重要なのは彼が無一文から出発していることである。この時代、ドイツ語圏は無数の小さな領邦国家に分かれており、封建的な支配体制が残されて官僚機構も整備されていなかった。後ろ盾のない市民知識層が社会の中心で活躍する道は総じてかぎられており、文学に手を染める市民知識層の若者たちもたいてい経済的な基盤が弱かった。[11] ゲッティンゲンのボイエのもとに集ったハイン同盟の若き詩人たちも、多くは貧しい家庭の出身で、経済的に苦しい中で詩作を続けていたし、[12] レンツとともにシュトゥルム・ウント・ドラングの代表的作家と目されるクリンガー Friedrich Maximilian Klinger（1752-1831）も、大学に行くことができたのは友人ゲーテによる経済的な支援のおかげであった。レンツの父親はリヴォニアの牧師である。彼は聖職者になることを求める父親の意向に背いて作家を志し、そのために実家の援助が受けられない状況にあった。奨学金を得てケーニヒスベルク大学で学んだが、その後故郷の町に帰るかわりに、学友であった男爵兄弟の教育係となって 1771 年シュトラースブルクに向かった。故郷を飛び出し経済的な支援がどこからも受けられないツェルビーンの状況は、レンツ自身の人生航路とそのまま重なっていたわけである。1774 年の秋、レンツは男爵兄弟の付き人をやめて文筆家として身を立てる道を探りはじめた。しかし難しかったようである。[13] ボイエに『ツェル

ビーン』を売り込む手紙には、「現金で 10 ドゥカーデンはいただかないとお渡しできません」、「複数の出版社から 10 ドゥカーデン払おうと言われています」[14] と、値段交渉に前のめりな様子が見て取れる。それだけ当座の収入を得る必要性に迫られていたのだ。

ツェルビーンは無一文から出発して、教養と学識のみを足がかりに身を立てようとしていた。教養と学識、という選択は、当時の若い詩人たちにしばしば見られただけでなく、市民的公共圏それ自体の成立のありようを映してもいる。経済的、政治的な活躍の道が限られていた時代に、学問や文学の営みは、市民知識層がその社会的、文化的な存在感を高めるための重要な足がかりとなった。この時期、知的な関心を共有する人々の集まりが増加し、そうした集まりを母体とする定期刊行物、また各種の文学的、学問的書籍の発行も増えて、文化的な発信の営みが盛んになる。[15] その営みはもっぱら学問的、文学的な関心に導かれていたが、ハイン同盟の若者たちの詩が愛国的言説のひとつの端緒となったように、そこには政治的な自意識形成と自己主張につながる回路がさまざまに内包されていた。

そのように市民知識層が学問や文芸を足がかりとして新しい公共圏を作り上げた時代の流れを、ツェルビーンの像はすくい取っている。ひとまず彼は、父から逃れ、自由な内面と教養の主体、すなわち「人間」としての顔を確立させることを目指している。いまだ「財産と家人の所有者」ではないから、社会制度や経済活動の担い手ではなく、その意味では「市民」になりえていない。しかし、まぎれもなくその卵ではあるだろう。「人間」の道を極めることによって、彼はあわよくば「市民」としての地位を確保しようとしているのだ。具体的には大学で職を得ることを目指しているのだが、そうした未来図には「財産と家人の所有者」になることが確かに含まれている。その意味で、彼もまた最初から「市民」の利害関係に組み込まれていたのだった。

2)

地道に歩みを進めていたツェルビーンだったが、ほどなくして雲行きが怪しくなる。躓きとなったのはひとりの女性への恋であった。

町一番の銀行家の妹で、兄と一緒に優雅に暮らすレナートヒェン。大きな黒い瞳と豊かな表情を持ち、その顔や体つきに「人を魅惑する全て」（358）をそなえていた。外見上の利点を活かして多くの崇拝者に取り囲まれ華やかな毎日を送っていたが、内心ではこのまま年齢を重ねることに焦りを感じていた。頭の中は、有利な結婚相手を見つけて玉の輿に乗ることでいっぱいだったのである。そんな彼女が、ツェルビーンの主人アルトハイム伯爵に狙いを定める。伯爵は単純だが性根の曲がったところもなく、真面目なツェルビーンには全幅の信頼を寄せていた。金持ちで性格も複雑すぎないので、レナートヒェンにとっては結婚にうってつけの男に見えた。しかし、なかなか思うようにいかない。「血液は水っぽく、神経の皮も厚い」と言われるような感性の鈍い男であるために、「彼女の目の炎をもってしてもそれほど速やかに温めることはできなかった」（360）のである。しびれをきらしたレナートヒェンは、アルトハイム伯爵をとりこにするために、ツェルビーンを巻き込むことにする。

ツェルビーンは、女性を前にすると気の利いたことも言えずに固まってしまうような奥手の若者だった。もちろん「女の手練手管などなにひとつ知らない」（360）。その一方で「とても感じやすい心の持ち主で、美というものが持つ利点に極度に敏感」（357）でもあった。そんな彼

をその気にさせることなど、レナートヒェンにとっては赤子の手をひねるようなものである。たちまち彼は彼女に夢中になる。寝ても覚めても彼女のことしか考えられなくなり、仕事もまったく手につかなくなってしまった。

ツェルビーンが就寝中もうわごとを繰り返すので、同室で寝ていたアルトハイム伯爵は心配になる。いったいどうしたのかと問うと、ツェルビーンは熱にうかされたように、レナートヒェンの魅力が人の子のものではなく神性そのものであること、神性が彼女の姿を借りて地上に顕現しているにほかならないことを語り始める。アルトハイムは彼のなみなみならぬ情熱に感銘を受ける。そして次第に、彼自身もレナートヒェンのことが気になり始め、いつしか欲望が首をもたげて、そのまま恋に落ちるのである。ひとたび目覚めた伯爵の恋は、ライヴァルの存在を意識しているために、とりわけ前のめりで情熱的であった。

すべてはレナートヒェンのもくろみ通りである。彼女は手のひらを返したようにツェルビーンに冷たくなった。今や彼もはっきりと悟る — 彼女の狙いは最初から彼の主人だった。もとより彼のことなど眼中になく、彼はただ、「他の心を狩り取るための道具」（359）として利用されたにすぎなかった。

ツェルビーンは悲壮な決意でレナートヒェンへの思いを断ち切る。しかし、踏みにじられた心の傷が癒えることはなかった。彼の内的な調和は留めようもなくむしばまれてゆく。

その上、アルトハイム伯爵との関係もだめになってしまう。それまで教育係として常に行動をともにし、なにかと頼りにされて友情を育んできたというのに、同じ女性を愛したことで二人の仲はまたたくまに冷え込んだ。伯爵は、ツェルビーンに手当てを「払い忘れる」（364）ようになる。誇り高いツェルビーンは催促などできない。学問にももう身が入らないので、以前のように生徒を集めて収入を得ることもできない。その一方で、失恋であいた心の穴をごまかすためには、カフェに行くなどの気晴らしも必要であった。収入の道を断たれたまま、ツェルビーンは多方面に借金を重ねてゆく。

そんなふうに経済的にも精神的にもどん底に落ちたところで「彼の物語の一番恐ろしい部分」（367）が始まるのである。

3）

ツェルビーンのなめた苦しみ、つまり階級に刻印された人間関係の中で軽んじられ、取るに足らない存在としてあつかわれるという苦しみは、ゲーテの『若きヴェルターの悩み *Die Leiden des jungen Werthers*』（1774）にも描かれている。[16] レンツが強く意識し、また執着したこの作家の作品には、主人公が報われぬ恋にはまり込む過程に、身分社会の中で屈辱と焦燥感を味わう苦いエピソードが織り込まれている。官職についたヴェルターは、自分が貴族とは同等の人間として扱われないことを思い知って深く傷つく。この経験から、彼は仕事の領域に活躍の場を見出し得ないことを悟り、その代償のようにして、すでにアルベルトと結婚していたロッテへの思いを深めて破滅へと向かうことになる。

ただ、たしかにヴェルターは報われぬ愛に足を取られて「市民」になる途上で挫折したが、だからこそその「人間」としてのあり方は純粋なかたちで証されているようにも見える。彼は結婚制度と衝突するかたちで愛してしまったが、それによって際立たせられた彼の自由な情熱は、それ自体「人間」としての普遍性を持っている。報われぬ愛は、彼を彼だけの情熱の主体、自

由な「人間性」の主体として強調するのだから。彼は悲劇的に愛することを通してこそ、自らの「人間」としての顔を確かなものにしたともいえるだろう。

ではツェルビーンはどうだろうか。ここでも主人公は、「人間」として扱われなかった痛手の代償のようにして恋の情熱に没頭することになる。新しい恋の相手は、下宿先で女中をしている農民の娘であった。

はじめての登場の場面で、彼女マリーは、悲惨な最後との落差を際立たせるようにことさら美しく彩られている。

> 彼女は若くほっそりしてノロジカのような足の、いつも陽気で明るい娘でした。限りなく善良で、この上なく姿がよく、美人ではないけれど人柄の良さがすべてあらわれた顔をしていました。まごころがあり、晴れやかで、人をどこまでも勇気付けてくれるようなその眼差しを見ると、誰の顔にも喜びと安堵が広がるのでした。（367）

ちょうどその日、ツェルビーンは借金取りに財布の中の最後の銀貨を渡したところだった。そこに、マリーが用事で部屋に入ってくる。いつものように晴れやかに、「踊るように」（368）入ってきたこの善良な娘に、彼は絶望した面持ちでやけっぱちに声をかける。彼は彼女にも金を繰り返し借りていたので、彼女もまた自分に返済を催促に来たのかと思ったのだ。荒んだ声で、返済額はいくらだ、と尋ねると、彼女は少し驚き、それから意外な答えを返す。「なんのことです、旦那様。いつのことでしょう。どこから来た話でしょうか。」（368）ツェルビーンは面食らう。そんなはずはないだろう、と言い募っても、彼女はなにも知らないと繰り返す。ツェルビーンには、彼女がなぜこのようにふるまうのかまったくわからなかった。それでも、彼女からなにかしら自己犠牲的な同情心を汲み取って、思わず「恥と怒りと感謝の涙」（368）をこぼす。すると彼女の目からも涙があふれた。にわかに二人は「不安な、ぞっとするような喜びの感情」（369）に襲われてひそかに抱き合う。

こうして始まった愛は、それ自体は確かに「人間」らしいものとして描かれている。つまりそれは、悲劇的な最後に至るまで、一貫して誰にも否定しえない自分だけの自由な感情として位置づけられている。

しかしその一方で、彼女との関係は、ツェルビーンの愛の観念を大きく変えてしまった。結婚の基礎を、経済的な要請ではなくまごころの感情に置き換えるというのは、啓蒙時代を通して市民的な言説空間の中で進められたことである。先に書いたように、「人間的なもの」を表現しようとする文芸作品の中では、私的な親密圏における愛こそが「人間的なもの」の具体的な発露とみなされていた。結婚はこの「人間」らしいつながりの場の中心にあり、それにふさわしく、経済的な要請ではなく個々人の自由な愛によって結ばれるべきものして強調されたのだった。[17] ツェルビーンも、元来はそうした流れにくみしており、結婚にこそ「人間」としての関係性を求め、「経済的な打算抜きで誰かと心を合わせ、結びつくこと」（366f.）を心から望む人間だった。

しかし彼はマリーと婚姻外の愛を育む。このことも、それ自体が彼の人間性にとって致命的だったわけではない。結婚は人間的な愛の場であると同時に「市民」としての社会的、経済的要請に厳然と規定されてもいたから、市民悲劇をはじめとする文芸の領域では、結婚において「市民」の規範と「人間」としての欲求が衝突するさまが繰り返し問題にされた。そうした文脈

においてならば、結婚制度から逸脱する愛もまた「人間」としての自己像の後ろ盾になりえたのである。つまり、『ヴェルター』がそうであったように、結婚に結びつかない愛もまた、「本来ならば結ばれたかった」という悲嘆をともなう認識があるならば、「人間的なもの」の証となりうる。愛と結婚の一致を、たとえ不可能であっても希求するということは、人間的なものとしての結婚という理念を、否定するかわりにむしろ補強するのだから。

けれどもツェルビーンは、マリーとの愛を経験する中で、まさにこの希求から離れてしまう。愛を通して彼は、個人の自由な感情としての愛と世間的な要求がそもそも一致せず、「人間」と「市民」は別の領域に属しているという認識に至った。結果的に、感情とは相容れないかたちで世間のしきたりが存在することに、なんら悲嘆を感じなくなる。今や彼はしきたりを淡々と受け入れてしまう。

> ツェルビーンが抱いていた神聖さの気高い観念、とっておきの幸福や、聖なる結婚生活の観念は消えてしまいました。アダムとイブがそうであったように、彼の目は開かれ、すべての物事をあるべき関係性において見るようになったのです。彼にとって、もはや結婚も政治的な意図に基づく二人の契約以上のものではありません。(369)

彼にとって個人的な愛の感情は、「市民」としての関係性において主張すべきものではなくなった。こうして「市民」の顔と「人間」の顔は切り離されてしまい、それとともに「市民」の顔は、ことさらに功利主義的でエゴイスティックな相貌をあらわにしはじめる。彼にはもうマリーとの結婚を真面目に考えることはできない。

> ライプツィヒの良識ある人々の神経を逆撫でして、あらゆる立派な人々の前で彼の美しい農民娘と結婚する — 今ようやく真実の炎に照らされ始めた哲学者、今はじめて、人間関係や身分からの離脱について、夢見がちな若者たちの愚かしさや空想の錯誤、そして真実の無限の領域について、真なる光で見晴らすようになった哲学者にとって、それは何といびつな考えだったことでしょう。(369f.)

彼の下宿先の大家には、ホルテンジアという娘がいた。本ばかり読んでいるこの娘は、学者の卵であるツェルビーンとあわよくば結婚できないかと思っており、父もこれを叶えることにやぶさかではない。父親はツェルビーンに、市参事会の職を世話し、多額の持参金をつけると言ってくる。彼はこの娘を少しも愛していなかったが、利口になった彼にとって、それはまったく悪くない話だった。

そんな中でマリーが身ごもる。ツェルビーンはうろたえるが、次のような「哲学」で切り抜けようとする。

> 衝動はすべての人間に共通した自然の定めである。自然の定めに基づく義務が、社会的な義務に対立するからといって、社会は自然から私を解放しえない。社会の義務と調和させうる限り、自然の義務は認めて良い — いや認めるもなにも、それは義務なのだ。そして私は、社会的に守るべき世間体というものも無視してはならない。つまり：私がマリーを説得できれば良いのだ。しばらくの間彼女の親戚のところに旅行すると言って密かにベルリ

ンに連れていく。そこで父を訪ね、彼女の部屋を借り、父と父の古い友人から入るはずの遺産の前払いで子どもをこっそりと育てさせる — そうこうする間に私は帰ってきて、金になる縁組を — これでマリーはずっと私のものとなる。人目を忍べばそれだけ、後の逢瀬は甘い — 愛には独自の場所と目的と義務が存在しており、それは結婚におけるものとは天と地ほどに異なっているのである。（370）

こうして彼は「自然の義務」、すなわち「人間」としての愛を、「社会の義務」、すなわち「市民」としての生活から切り離し、切り離しつつ陰の領域で維持して、「市民」の顔の確立に励むことにする。しかしそれによって「人間」の領域は変質せざるをえない。なぜならそこは、社会的な認知を失うことで、日の当たらぬ、エゴイズムによって搾取されるだけの場所に成り果てるからである。マリーはそこに押し込められたのだった。

4）

いまや打算的な生き方に目覚めたツェルビーンは、あらためて教養と学識で身を立てる計画を再開する。もう学問も彼にとっては普遍的人間的なものへの回路ではなく、もっぱら「市民」の顔を獲得するための手段となっている。彼は難解な専門分野を手放し、流行の分野に手をのばして、それによって順調に学者としてのキャリアをつんだ。「自然法と国際法の上に哲学的道徳学を詰め込んだものを概説書にして出版すると、学術系の新聞がこぞってこれを持ち上げました。」（371）下宿の大家の娘との縁談話も表面上はうまく進む。

その一方で、ベルリンの父親をあてにしてマリーとの関係を維持する計画はうまくいかなかった。かつて金貸しで財を成した父親は、今は強盗に入られて無一文になっており、頼れる人もおらず、長年音沙汰のなかった息子に遺産の前払いができるどころか、彼を頼ってライプツィヒに来たいと言いだすありさまだった。追い詰められたのはマリーである。彼女は当初、ツェルビーンがなんとかしてくれると信じて、自分の妊娠のことは彼以外の誰にも打ち明けずにいた。そのうちツェルビーンの父親から財政的な援助がくれば事態は好転するからと、彼が大家の娘と接近しても、黙って見ていたのである。しかし、父親の破産が知らされて、彼女の望みは絶たれた。ツェルビーンに結婚を懇願しても、聞き入れてはもらえない。そんなことをすれば学者としての道が閉ざされるから、と言うのだ。それでもマリーは、彼を支えると決めてしまう。愛にほだされて、「あらゆる運命の嵐に打ち勝って、彼の名望と名誉を守ろうと固く決心して」（373）しまうのである。やがて彼女は馬小屋でひとり出産する。死産であった。ほどなくして赤ん坊の遺体が見つかる。彼女は逮捕され、投獄される。

この小説のマリーをめぐる箇所は、18 世紀後期に注目を集めた「子殺し女 Kindermörderin」の主題を文学に表現した最初期のひとつである。[18] 当時婚姻外の出産はすでに刑罰の対象ではなかったが、道徳的に許しがたい罪であったことにかわりはなく、その当事者になることは、生涯まっとうな者として認めてもらえず、社会の最下層に押し込められることを意味していた。それを恐れて妊娠を隠した女性、ましてや産まれた子を手にかけた女性には、厳しい制裁が加えられた。マリーのように妊娠を隠していた場合に、死産の申し立ては通らない。子殺しの罰は死刑であった。

マリーのエピソードは、ゲーテの『ファウスト』（1808/1833）を生んだことで知られるズザ

ンナ・マルガレーテ・ブラントの事件に着想を得たとされる。孤児として育ち、フランクフルトの小さな旅館で女中として働いていた彼女は、旅館の客にワインを飲まされて暴行され、妊娠する。1771 年の夏に嬰児殺しの罪で逮捕され、翌年一月に 24 才で斬首となった。[19]

ズザンナ・ブラントの事件からは、のちに『ファウスト』第一部を成すことになるグレートヒェンの悲劇が 1775 年頃までに書かれたほかに、ヴァーグナー Heinrich Leopold Wagner（1747-1779）による悲劇『子殺し女』（1776）が生まれている。「子殺し女」をあつかった文学作品には、ほかにビュルガー Gottfried August Bürger（1747-1794）のバラード『タウベンハインの牧師の娘』（1781）や同じくバラードであるシラーの『子殺し女』（1782）などがある。[20]

「子殺し女」は、社会の問題を複層的に炙りださずにはおかない主題であった。ヴァーグナーの『子殺し女』では貴族の大尉が市民の娘エボーヒェン・フムブレヒトを強姦して妊娠させ、子殺しに追い込む。[21] またビュルガーのバラードでは、地主貴族のファルケンシュタインが美しい牧師の娘ロゼッテを甘い言葉で誘惑する。[22] こうした作品では子殺しのモチーフが身分社会の搾取構造に重ねられており、同時代の多くの市民悲劇がそうだったように、第一には貴族が搾取者として告発されるかたちになっている。ただそれだけではなく、それらの作品においては、若い娘を追い詰める厳格な父親たちも問題にされた。因習的な父親像を通して、市民道徳それ自体の硬直性が浮き彫りされたのである。つまりそれらの作品では、社会批判の射程に、貴族社会と市民社会の問題がともに含まれていたのだ。嬰児殺しの罪において罰せられるのは女性のみで、そもそも望まぬ妊娠をまねいた男性側の責任は宙吊りである。そのアンバランスは、所与の社会が女性という立場を割り当てられたものにとってきわめて不利な構造を持つことを、浮かび上がらせる。子殺しの問題に光を当てることで、所与のヒエラルヒー構造、またこの構造にともなう暴力が、複層的に、つまり貴族だけでなく家父長的な市民社会自体の問題として、あぶり出されるのである。

『ツェルビーン』は、そのように市民社会それ自体に対して批判的な構造を持つモチーフを取り入れているわけだが、特徴的なのは、ここで非人間的な顔を暴かれるのが、市民社会というよりも市民知識層だということだろう。「子殺し女」を主題とする作品、またいくつかの市民悲劇の中で、その批判が貴族のみではなく市民社会の非人間性に向かうとき、この非人間性とは、娘の気持ちを顧みない厳格な家長に体現される、私的領域における権威主義と硬直性のことであった。この硬直性を告発する視点は、「人間」の立場からテクストを紡ぐ市民知識層のものであり、その意味でそれは、市民知識層による「市民」批判としてとらえることができる。「人間」としての自意識に支えられ、普遍的なものの主体として発信する市民知識層は、文芸の領域においては、「人間」としての視座から「市民」の非人間的な側面を批判する主体でもあったのだ。しかしツェルビーンはそのような批判の主体にならなかった。「人間」の立場から社会の権威構造を、また「市民」を批判するかわりに、彼は「人間」を影に押し込めることを選んだのである。つまり彼は、「人間」としての顔を表現するためのひとつの重要な手段を、手放したのだった。

ゲーテによるグレートヒェンの悲劇も、あくなき可能性をもとめる市民的知識人のありようから生まれる暴力を描いており、その意味では市民知識層自身に批判的な言説となっている。[23] ただ、可能性を希求するというそのあり方自体が『ファウスト』において断罪されているわけではない。むしろこの長大な戯曲では、紆余曲折を経てそうした希求が人間的な光を失わないさまこそが描き出されている。それに対して『ツェルビーン』は、市民知識層が「人間」の顔

を失うさま、つまり自らの「人間性」を他に対して表現しえなくなる過程のみに焦点を当てており、その点で特異な作品であった。

マリーの窮状に見て見ぬ振りをし続けたツェルビーンは、逮捕の後も頬被りをきめこむ。マリーは最後まで誘惑者の名を明かさなかった。黙ってすべての罪を引き受け、斬首となる。この過程で彼女の姿は、人間を通り越して聖なる存在にまで高められてゆき、最後はきわめて感傷的な哀悼で彩られることになる。

> 町では、まだ彼女の恩赦が噂されていました。最後の瞬間まで、彼女に目隠しが付けられてもなお、みな恩赦を期待していたのです。こんなに愛らしい存在に手が下されるということを、誰も理解できなかったし、わからなかったのです。説教師にも慰めの言葉は見当たりませんでした。（…）彼女の首は落とされました。
>
> 最後の瞬間まで、彼女の表情や姿全体、また腕や頭が力なく垂れた様子にさえも、その性質の良さを際立たせている愛らしく穏やかな明るさが残っていました。（377）

人を身分でしか評価しない価値意識のもとで、みずからの「人間」としての顔を踏みつけにされたとき、ツェルビーンはこれを告発することによって、またはより「人間」的な情熱を追求することによって「人間」としての顔を救うかわりに、これを陰に追いやって「市民」の顔を追求し、結果的に自分よりも立場の弱いものを搾取するだけの存在になってしまった。悲劇を通して「天使」の顔を与えられたマリーの姿は、「人間」の顔を失い、それによって道徳的に肯定しえない存在になり果てたツェルビーンの転落を際立たせている。

そんな彼も、この物語の最後では、罪を抱えたまま道徳性に立ち戻ることになる。街中が美しい子殺し女のことで話題がもちきりのなか、彼はしばらくただ呆然としていた。しかし「彼だけに聞こえる非難の声」（378）を受けとめていたのである。やがて彼は、街を取り囲む壕に身を投げる。後には二通の手紙が残されていた。一通はマリーに宛てられており、「罰する権利はお前だけにある」（378）と、彼女からの「判決」を聞くために自死することが書かれていた。もう一通は、マリーを世間に対してかばうためのものである。「私たちの結びつきが公的に認められなかった唯一の原因は私にある。思いこみの教養と高慢こそが障害であった。」（378）自らの罪を詳細に記したこの手紙は、次のような言葉で締めくくられている。「自分を憎むことはできない。しかし私は自分を軽蔑する。」（379）こうして自らの非人間的な顔を断罪することを通して、彼は、自身をかろうじて「人間」につなげたのだった。

おわりに

18 世紀における市民的公共圏の発展の中で、市民的な価値意識や理念は「公論 öffentliche Meinung」としての地位を確立させていったが、この状況は時とともに変化する。ハーバーマスは、市民的公共圏を批判的にとらえた初期のものとしてヘーゲルの公論理論を挙げている。（195f.: 159f.）すなわちヘーゲルは、産業化の進行にともない社会的な分断、つまり一方で富が蓄積され、他方で労働につながれた階級の「隷属化と窮乏」が増大するという事態が進めば、「論議する私有財産所有者たちの共通の — そして普遍性を自称する — 利害関心を、単に特殊利害にすぎぬものとして弾劾するにたる利害衝突」が生じることになると論じた。（197: 161）実

際にマルクスはそのような弾劾を行う。彼は、市民的公共圏がその「ブルジョア的階級利害の仮面 Maske des bürgerlichen Klasseninteresses としての真の性格」を、「自分自身の目から」も「秘匿」(202: 166) していると批判し、公共圏と個々人の関係を組み換えようとしたのだった。ハーバーマスによれば、産業社会の拡大とともに「ブルジョア的階級利害の仮面」はその効力を失ってゆくことになる。すなわち「国家と社会が浸透しあっていくにつれて」(238: 207)、また家族の親密圏が社会と切り離されてゆくにつれて、親密圏に根ざした人間性をになう自由な主体、という市民的な自己像も、またこの自己像にこそ基づき、普遍性と政治性をあわせもった市民的な「公論」も、成り立ちえなくなるのである。

市民的公共圏が「ブルジョア的階級利害の仮面」と弾劾されるにいたった背景に、ハーバーマスが論じたような社会構造の変化があるとしても、しかしこの「仮面」という側面は、そもそも最初から存在していたはずである。つまり市民知識層のつむぐ言説には、自らの言葉の偶然的要素を「自分自身の目から」も秘匿するような構造が最初からあり、その意味ではじめから、内側に欺瞞を抱えていたのだ。「人間」という自己理解は、この秘匿の構造の柱であった。

『ツェルビーン』は、輝かしい「フマニテート」の理念のもとに「秘匿」の構造が機能し、市民知識層の言葉が「人間」のそれとして流通してゆく 18 世紀の流れに、いかにもそぐわない。しかしだからこそ、そこで埋没した問題状況に光を当てるものともなっている。いまだ「財産所有者」ではなく、ただ教養という元手によって「フマニテート」の主体となり、発言力を高めた市民知識層は、文芸の場においては、「財産所有者」たる家長に対してさえ、「人間」の立場から異を唱えることができる存在であった。しかし『ツェルビーン』は、主人公にそのような人間的な批判者になる道を与えなかった。同時に、自由な愛に賭けることで人間性を悲壮に歌う道も与えなかった。そのようにして市民知識層から「人間」として自己表現する道を奪い、「市民」と「人間」をあえて分離させたことで、この作品は、市民知識層を階級的な利害の主体として浮き彫りにしている。ここでは人間的であるはずの愛もまた階級的なヒエラルヒー構造と無関係ではありえない。ヒエラルヒー構造の中で市民知識層が搾取され、また搾取するさまを描くことで、この作品は、やがて露呈することになる市民的な言説の欺瞞、すなわち「市民」でありながら「人間」として語ることの否定しがたい欺瞞を、どこよりも早く問い直すものとなっている。階級的な利害の主体としての姿をさらし、この利害から生まれる罪を自覚したツェルビーンの物語は、当時の文芸公共圏に決定的に欠落していたものを浮かび上がらせている。

それだけではない。ここでは「市民」と「人間」が切り離されたその帰結として、後者が前者に搾取されつくす過程が克明に描き出されていた。「市民」と「人間」を無自覚に重ねることが欺瞞であるとしても、だからといって両者の分断が正しいことにはならない。ふたつの顔の両立をあっさりとあきらめ、結果的に両者をともに失ったツェルビーンの姿は、「人間」の顔を確保した上でなされる「市民」批判よりも明確に、この両立を、困難な、しかし放棄することのできない課題として指し示している。

註

1　G. E. Lessing: *Hamburgische Dramaturgie.* In:*Werke und Briefe in zwölf Bänden. B. 6. Werke176z7-1769.* Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1985, S. 250f.

2　Ludwig Ysenburg von Buri: *Ludwig Capet, oder Der Königsmord. Ein bürgerliches Trauerspiel in vier Aufzügen.* Neuwied (Gehra) 1793.

3　Ebd., S. 3.

4　Jürgen Habermas: S*trukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990.* Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1990. ユルゲン・ハーバーマス（細谷貞雄，山田正行訳）：公共性の構造転換 ―市民社会の一カテゴリーについての研究（未來社）1994．引用は括弧内にそれぞれの頁数のみを示す。

5　Jakob Michael Reinhold Lenz: *Zerbin oder die neuere Philosophie.* In: *Werke und Briefe.* Hrsg. von Sigrid Damm. Bd. 2. Frankfurt a. M; Leipzig (Insel) 2005, S. 354-379. 引用は括弧内に頁数のみを記す。

6　Vgl. Boie an Lenz. 10. Januar 1776. In: Jakob Michael Reinhold Lenz: *Werke und Briefe.* Hrsg. von Sigrid Damm. Bd. 3. Frankfurt a. M; Leipzig (Insel) 2005, S. 364.

7　シラーは 1797 年の『ホーレン *Horen*』に未完の書簡体小説『森の隠者 Der *Waldbruder*』を、1798 年の『詩神年鑑 *Musen-Almanach*』には小劇『タンタルス *Tantalus*』と詩を掲載した。

8　J. M. R. Lenz: *Gesammelte Schriften.* Herausgegeben von L. Tieck. 3 Bände. Berlin (G. Reimer) 1828.

9　Boie an Lenz. 8. März 1776. In: *Werke und Briefe.* Bd. 3 (Anm. 6), S. 396.

10　この作品の小説としての特徴については以下を参照。Friedrich Voit: Nachwort. In: *Jakob Michael Reinhold Lenz. Erzählungen. Zerbin, Der Waldbruder, Der Landprediger.* Hrsg. von Friedrich Voit. Stuttgart (Reclam) 1988, S. 145-163, hier S. 149f.

11　当時の市民知識層の社会的状況については以下を参照。Bernhard Giesen: *Die Intellektuellen und die Nation.* Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1994, S. 131f; Franz Werner: *Soziale Unfreiheit und „bürgerliche Intelligenz“ im 18. Jahrhundert. Der organisierende Gesichtspunkt in J. M. R. Lenzens Drama „Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung“.* Frankfurt a. M. (R. G. Fischer) 1981, S. 93-204.

12　Vgl. Hans-Martin Blitz: *Aus Liebe zum Vaterland. Die deutsche Nation im 18. Jahrhundert.* Hamburg (Hanburger) 2002, S. 392-394.

13　Vgl. dazu Friedrich Voit 1988 (Anm. 10), S. 146.

14　Lenz an Boie. Dezember 1775. In: *Werke und Briefe.* Bd. 3. (Anm. 6), S. 358.

15　出版文化全般の一八世紀における発展については以下を参照：Michael North: *Genuss und Glück des Lebens: Kulturkonsum im Zeitalter der Aufklärung.* Köln; Weimar (Böhlau) 2003.

16　Johann Wolfgang Goethe: *Die Leiden des jungen Werthers.* (2. Fassung.) In: *Die Leiden des Jungen Werthers. Die Wahlverwandtschaften. Kleine Prosa. Epen.* Hrsg. von Waltraud Wiethölter in Zusammenarbeit mit Chrietoph Brecht. (*Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräch.* 1. Abteilung: Bd. 8) Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker) 1994.

17　18 世紀における恋愛や結婚の観念の変化については以下を参照。Niklas Luhmann: *Liebe als Passion. Zur Codierung von Intimität.* Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1982; Jutta Greis: *Drama Liebe. Zur Entstehungsgeschichte der modernen Liebe im Drama des 18. Jahrhunderts.* Stuttgart (Metzler) 1991; Günter Saße: *Die Ordnung der Gefühle. Das Drama der Liebesheirat im 18. Jahrhundert.* Darmstadt (WBG) 1996.

18　「子殺し」はこの時期に広く関心を集めた話題であり、1780 年にこれが懸賞論文のテーマとなった時は 18 世紀の他のどの課題よりも多くの反応があったという。Vgl. Daniel Wilson: „Kindsmord.“ In: *Handbuch Sturm und Drang.* Hrsg. von Matthias Luserke-Jaqui unter Mitarbeit von Vanessa Geuen und Lisa Wille. Berlin; Boston (Greuyter)

2017, S. 68-74, hier S. 68.

19　この事件の詳細については以下を参照。Rebekka Habermas; Tanja Hommen (Hrsg.): *Das Frankfurter Gretchen: Der Prozeß gegen die Kindsmörderin Susanna Margaretha Brandt.* München (C.H.Beck) 1999. ビルクナー編著（佐藤正樹訳）『ある子殺し女の記録 —18 世紀ドイツの裁判記録から』人文書院、1990 年。

20　Wilson 2017, S. 70.

21　Heinrich Leopold Wagner: *Die Kindermörderin. Ein Trauerspiel.* In: *Deutsche National-Litteratur.* Historisch kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. Bd. 80. *Stürmer und Dränger II. Lenz und Wagner.* Hrsg. von Dr. A. Sauer. Tokyo (Sansyusya) 1974, S. 283-357.

22　Gottfried August Bürger: *Des Pfarrers Tochter von Taubenhain.* In: *Deutsche National-Litteratur*. Historisch kritische Ausgabe. Hrsg. von Joseph Kürschner. Bd. 78. *Gedichte von Gottfried August Bürger.* Hrsg. von Dr. A. Sauer. Tokyo (Sansyusya) 1974, S. 241-246.

23　Johann Wolfgang Goethe: *Faust. Eine Tragödie.Texte.* Hrsg. von Albrecht Schöne. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker) 1994.